

倉本聰

富良野塾の記録

谷は眠る



富良野塾の記録

谷本聰

倉本聰

理論社

この作品は「チェックメイト」(講談社)一九八七年八月号〜一九八八年十二月号に連載されたものです。

倉本
聰

今日だけを生きている若者がいる
明日を気にしている若者がいる
未来を考えている若者がいる

不安でいっぱいの子供がいる
不安を忘れようとする子供がいる
不安と闘っている子供がいる

叱られたことのない若者がいる
愛したことのない若者がいる
信じたことのない若者がいる

やさしさを知らない若者がいる
やさしさを忘れた若者がいる
やさしさを誤解した若者がいる

闘いを避けている若者がいる

闘いを見るだけの若者がいる

闘いにとびこむ若者がいる

敗北を知らない若者がいる

敗北を恐怖する若者がいる

敗北がいかに貴重かということを

考えようとする若者がいる

目的を持たない若者がいる

目的を探している若者がいる

目的に向っている若者がいる

感動を知らない若者がいる

感動を知っている若者がいる

感動を求めている若者がいる

坐つて待つてゐる若者がいる

待つていれば誰かが与えてくれると

巢の中の雛のように待つ若者がいる

待つていても何も始まらないと

必死に跳ぼうとする若者がいる

そんな若者の

せめて何人かに

今この俺の

してやれることは何か

谷は眠っていた

——富良野塾の記録——

装帧·装画
小野州一

一九八三年・秋

一九八三年・秋
一九八三年・冬
一九八四年・春
一九八四年・夏
一九八四年・秋
一九八四年・冬
一九八八年・現在
あとがきにかえて

295 265 227 175 145 99 55 11

谷は眠っていた。

富良野岳の山裾。かすかな沢音と虫のすだき^{*}だけが荒れ果てたその谷を支配している。

此処^{ココ}へ来る途中で道は途絶えていた。

道の山側が土砂崩れを起し、崖の中腹に生えていた白樺が土砂といっしょに根こそぎ流出して道の中央にどんと立っている。僕らはそこでジープを捨てた。

谷の広さは四町歩^{しちふ}もあろうか。

崩れかかった廃屋が一軒と、はるかに牛舎の残骸が見える。

半壊したサイロが灌木の上にのぞいている。

鹿の群でも眠っていたのだろうか。丘の上の草がなぎ倒され、いくつもの獣の足跡があった。

太陽だけがじりじりと照っている。

開拓者がこの土地を見捨てて去ったのは既に十数年前だときいていた。

以来この谷は眠りつづけている。

廃屋に近づき中をのぞいた。

女房と橋本とオニとヤス。夫々無言で中をのぞきこむ。

土壁は既に殆んど崩れ落ち、窓のガラスは全て割れている。抜け落ちた床の上に古いランドセル。半壊した壁にクレヨンの書き置き。

〈淋しいときは、あの峯を見た〉

廃屋の情景はいつもいたましい。

「とにかく。これをまず直すことだな。これを直して住めるようにしよう」
誰も答えず、しんと黙っていた。

「北の国から」というテレビドラマを書いた。

都会に育った純と螢という幼い兄妹が、両親の離婚の末、父に連れられ北海道富良野の過疎の村に帰ってくる。父の育ったかつての家は既に半壊した廃屋であるが、親子はその家で生活を始める。

電気も水道もない原点の暮し。